

『滴に濁る物語』の敬語について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 勝山, 幸人 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00001114

『滴に濁る物語』の敬語について

勝 山 幸 人

『滴に濁る物語』とは

この物語本は、かつて山岸徳平が所有し、現在は実践女子大学図書館に収められている題箋も内題もない残欠であつて、作中に詠まれた、中納言の

まことにや結び合はせし忍ぶ草などあやにくに露けかるらん

の一首が、『風葉和歌集』巻九の哀傷にある

贈皇后宮にうちとけずながらみなれ侍けるがかくれ給ひてのちのきのしのおをみて

滴に濁るの中納言

まことには結びやはせし忍ぶ草などあやにくに露けかるらん（巻九・六九五）

とほぼ一致することから、物語の研究者の間ではこれを仮に『滴に濁る物語』と呼んでいるのである。したがって、書名は、『滴に濁るの中納言』でも、ただ『滴に濁る』でもよいし、また『古今和歌集』巻八に見える紀貫之の

むすぶ手の雫ににこる山の井のあかでも人に別れぬるかな

に因んで、『事ににこる』であつても構わない。古歌の一句をとつて物語の題名とすることは、平安末から鎌倉時代にかけて流行した物語の命名法らしい。⁽¹⁾作者や成立年代はむろん不明であるが、中野幸一は、「巻末近くに見える幼帝の描写が際立つて生彩ある点などから」年配の女性の手によって南北朝あたりに書かれたものと推定するが、⁽²⁾後に述べる通り、私はそれとは違う見方をしている。

書誌については、前半部の三分の一程が欠落していること、十八帖あたりに空白部があり、ために錯簡が考えられること、また唯一無二の孤本であることなどが報告されている。⁽³⁾一方、内容の上から見て、先行する『源氏物語』との影響が指摘できるうえ、念仏による救済を願う中世的な雰囲気物が語り全体を色濃く覆っている点から、これが鎌倉時代の擬古物語とも作り物語とも言われる散逸した中世王朝物語の一つであることは疑う余地もないところである。

物語の展開は、帝と内侍督との間に若宮を儲けるのもつかの間、まもなく内侍督は死んでしまう。亡骸を音羽山麓で火葬にしようとするが、現世に未練があるらしく燃え尽きることはない。悲嘆にくれた帝は、内侍督に皇后宮の位を与え、その際に詠んだ歌がまさに鎮魂の歌となつて、内侍督は天に昇っていく。帝は、後を宰相の中將に託し、また若宮を女一の宮に預け、自らは嵯峨に出家し、法華經を唱誦しながら即身成仏を遂げる。後に、宰相の中將は閑白になり一家は栄え、若宮も帝となつて善政を行なつた、といった単純なものである。どのみち小品には相違なからう。

物語では、中納言と内侍督との関係がいわば生命線になつており、二人は互いに思いを寄せていたことは確かである。『風葉和歌集』巻十一の恋一には、

題知らず 滴に濁る贈皇后宮

つつめども袖のしがらみせきわびぬ涙の川や浮名流さむ(巻十一・七九七)

とある。この歌は、恐らく前半部の欠落した部分にあつたと思われ、現存する孤本には残っていないのだが、『風葉和歌集』

は、帝を氣遣い不義密通の汚名を憚つて恋しい氣持ちを内面に抑える内侍督と、中宮の兄という立場もあり、一線を越えてはならない苦しいジレンマを抱く中納言と、しかし遂に結ばれることのなかったこの二人を物語の中心において、この歌二首を載せているのであろう。詞書はこれを説明したものにも他ならない。

一方、この物語の主題を「離別」に求めようとする三谷邦明の説も十分傾聴に値する。内侍督の突然の死といい、帝の思いがけない出家といい、罪を負うかのように現世を離れまた死していくのも、どのみち最愛なる肉親との離別以外のなにものでもないからである。だが、物語の最後に、些か異例とも思われる

(1)これを御覽ぜむ人は、念仏申させ給ふべし、必ず必ず。(27)

があるが、私にはこの一文がどうにも氣になつて仕方がない。後の書き入れかもしれないが、読者を意識したことが明らかなの一文は、関白一家の繁栄を思つてのことか、即身成仏を遂げた先帝の威徳を供養してのものか、あるいは帝を中心として未来永劫に国家安寧であることを願つてのことか、何れにしてもよくわからない。あるいは、物語中に

(2)仏は『妻子珍宝』とこそ仰せられたれ (26)

(3)一偈一句乃至一念隋喜 (22)

と經の文句を引用しており、作者自身が仏教に通じてことは明らかであつて、説法教化の片鱗を垣間見せているとも考えられよう。この物語の主人公は誰か、主題は何か、また作者はどんな人かといった問題とも多分にリンクする一文ではあると思われるが、もしそうだとしたら、物語作者の構想した中には、『風葉和歌集』に取り入れられたような中納言と内侍督との関係には求められないことになる。少なくとも、『滴に濁る物語』には平安の王朝文学にみるような典雅な匂いも花もまた音楽もないことは確かであつて、そこにあるものは、念仏による救済と無常観であつたといえよう。

『滴に濁る物語』の本文について

本文は、夙に山岸徳平の翻刻したものを初めとして、市古貞次・三角洋一編『鎌倉時代物語集成』第四巻に載せており、⁽⁶⁾物語研究の援けとなっている。また最近では、室城秀之『中世王朝物語全集』第十一巻もあるが、これは読みやすさを優先させて、送り仮名を補い、仮名遣いや漢字を改め、字句の補填などを行っているため、国語学的な研究には不向きである。ところで、本論文の目的は、『滴に濁る物語』の敬語使用の実態を解明すること、また個々の用例を敬語史に照らし合わせることで、中世文語の特質を明らかにしながら、広く擬古文を和文体の史的展開のなかに位置づけようとするものである。敬語は、文体の構成要素として重要な機能を果たしているばかりでなく、鎌倉時代の人の文語意識を探るには、意味の多様化する語彙などを扱うよりはるかに客観的で有効な手段となるからである。また、本論文は『滴に濁る物語』が中世王朝物語の一つであることを言葉の面から実証することにも通じるかと思われる。

『滴に濁る物語』にみる敬語

各節に入る前に、『滴に濁る物語』で使われているすべての敬語を示しておきたい。

まず、尊敬語であるが、「思す」「思し召す」「おはす」「おはします」「宣ふ」「参る」「御覧す」「仰す」「仰せらる」「召す」「大殿籠る」の11語の本動詞のほか、補助動詞「給ふ」と「せ給ふ」「させ給ふ」がある。また、助動詞の「る」「らる」を尊敬の意として使われた例が認められる。

謙讓語では、「参らす」「奉る」「聞こゆ」「奏す」「申す」「参る」「候ふ」の7語の本動詞のほか、補助動詞「奉る」「聞こゆ」「参らす」がある。

丁寧語としては、「侍り」「候ふ」が本動詞でも補助動詞でも使われている。

概観したところ、けしてバラエティーに富むものではない。基本的には平安時代において頻出する中間敬語とそれに対応する絶対敬語が対立する単純な構図を基本軸として、つまり文語として取り込み、新たに中世になって伸張する敬語が重層的に混在するといった様相を呈しているのである。

敬意の軽減と敬語の省略

「給ふ」と「せ給ふ」「させ給ふ」、また「御覽す」と「見給ふ」、「宣ふ」と「仰す」「仰せらる」、「おはす」と「おはします」など、身分や立場に応じた微細な使い分けが消滅し、平均化してしまうことは、擬古文の敬語の大きな特色である。⁸⁾『滴に濁る物語』もその例外ではないが、ここでは敬意を軽減させたり、敬語そのものの使用を省略したりする例が、至るところに認められる。

(4) 中納言、「いどど、いかに我を憂しと思すらむ」と推し量らる。(2)

内侍督が中納言を恨めしく思っているのではないかと推察している場面だが、この「推し量らる」の助動詞「る」が問題である。中納言に対する敬語は、

(5) (殿の上へ)「中納言は、いかばかり、あはれに思し召すらん」と思ふに、「我をも、憂しこそは思し召すらめ」と思す。(10)

と、まれに最高敬語で待遇されることもある人物である。これを自発と理解すれば中納言への敬語は省略されることになる。仮に、この「る」を尊敬と捕るにしても、敬意の軽い扱いとなる。

(6) 中納言は、傍らにのみ添い臥して、若宮など見給ひしにも、「いとど、いかに憎しと思すらん」と推し量り給ふにも、…
では、若宮に対する敬語はない。

驚くべきことに、最高位たる帝や女院に対してさえ敬語のない例が至るところに散見する。若宮に位を譲る決意をした、

(7) 内裏は、夜昼、念仏に心を入れても、なほ、あぢきなく思し召せば、降りなんの御心あるべし。(19)

の例では、帝に対する敬語はなく、省略されていることがわかる。

尊敬の助動詞「る」「らる」

平安時代における尊敬の助動詞「る」「らる」は、「御覧す」「仰す」「思す」など、敬語動詞に下接して敬意を高めることが主たる用法であって、単独で敬意を表す

むかし堀川のおほいまうちぎみと申す、いまそがりけり。四十の賀、九条の家にてせられける日、中将なりけるおきな…(伊勢物語 九十七)

同じ御時(＝宇多天皇ノ御世)せられける菊合せに、州浜を作りて、…(古今和歌集五、二七二の詞書)

などは、普通に最も古い例と言われているものであるが、これとて非情主語の受身か、あるいは可能かとも疑われるのが現実であって、何れにしても一般化するには至っていなかった。森野宗明は、男子の手になる変体漢文の記録や、それを文体の基調としている『今昔物語集』や『平家物語』などの「被」字を尊敬に訓むことを起源として、なお和文体におい

ては一〇七年に程近い成立の『讀岐典侍日記』あたりになつて顯著になること、また、ごく僅かな用例を見る『源氏物語』や『枕草子』では男性を話し手とした会話文に局限されたことから、男性の言葉遣いであつたことを述べている。⁽¹⁰⁾

『滴に濁る物語』では、この尊敬の助動詞を頻繁に使うことが、いわば特色となつている点に注意してよい。いくつか例を示してみたい。

次は、帝が讓位した後、嵯峨野に出家した折、内侍督の兄である宰相の中將（この時摂政）に對して、後は若宮を自分の代わりと思つて後見してほしいこと、また亡き妹の御堂の建立を頼みたいことを述べた次の文だが、

(8) 「そこ（＝宰相の中將）を頼みてこそ、いまだ乳の中なる人（＝若宮）をうち捨てて思ひ立ちぬれ。内裏の上をこそ、わが身とも、また失せにし母の代はりとも思ひなして、『構えて、平らかにて見む』と思はるべけれ。『うち捨てて、我に具せん』と思はれば、なかなか、『亡き後までは』となん、恨めしかるべき」と、御目押しのこはせ給ひて、また、『故内侍督の御料に、必ず御堂建てらるべし。内裏（＝若宮）は言ふかひなくおはします。…』など、仰せられ置くことども、悲しともおろかなり。」⁽²²⁾

この帝の發言中、「思はるべけれ」「思はれば」「御堂建てらるべし」は、何れも宰相の中將への敬意。自発とは考えられない文脈である。

(9) (帝ハ)「…(若宮ガ) 幼くて、まつりごとし給はざらんほどは、一品の官に申し合はせて、臣下をこがましからず、非道まつりごとなく、よくよく後ろ見奉られよ」など…⁽¹⁹⁾

では、帝は宰相の中將に若宮の政を支援するように言う。ここでも「後ろ見奉られよ」と軽い敬意で済ませているのである。宰相の中將へは、これらのほか、

(10) (帝ハ) 宰相の中將には、「さりとも（＝内侍督ガ亡クナッタコト）、いかでか、さることやあらん。確かなること

聞かせよ」(6)

と敬語のない例も帝の会話文中にあることに注意しておきたい。

次の例、すなわち内侍督が自分の死を暗示した歌を帝に贈ると、帝は、

(11)「いかばかり思ひけるにか」と御覽する御心地、なのめならんやは。(5)

と内侍督にも敬語を省く。

(12)また「靡きにけり」と、内裏の聞かせ給はん恥ずかしさなどにも、なかなか「なからんのみぞよからめ」と、ただ同じきさまにのみおはす。(5)

の例では、帝が内侍督と中納言との仲を疑うのは不本意であつて、いつそ死を覚悟する他ないと氣弱くなっているところ。物語では、はっきりとは書いていないが、若宮の出生が実は内侍督と中納言の子ではないかと疑える展開になっている。この「靡きにけり」もまたその一つであつて、今氣がついたかのように表現しているのはおもしろいが、それはそれとして、帝の内侍督への敬語はない。話題の主、すなわち帝が内侍督と中納言のいる場面に居合わせていないから敬語を省略するとは、いかにも現代語的ではある。

これらの例が示すとおり、仮にも摂政であつたり、また贈皇后宮であつたりする人物に対する帝の発言中に、敬意を軽減したり省略したりすることは、普通ではありえず、また聞き手重視の相対化した敬語法の嚆矢的な使われ方とも思えず、やはり中古の和文とは径庭があり、十分にこなれた敬語表現にはなっていないという点は否めない。

私が、この物語の作者を男性ではないかと推測する理由も、ちょうど紀貫之が女性に仮託して書き上げた『土佐日記』で、

船君節忌みす。精進ものなければ、午刻より後に、舵取りの昨日釣りたりし鯛に、錢なければ、米をとりかけて落ち

られぬ。(二月十四日)

と叙述したことが、日常的に漢文を読み書きしていた貫之の言語的な経験の反映であると考えられるように、尊敬の助動詞「る」「らる」の多用が、間違いなく男性であつたからこそ、日常の言語習慣が思わず出てしまったと考えられたからである。仏教に精通して念仏による救済を願っているかのごとき物語展開とちやうど軌を一にして、結果的に平安時代の敬語を取り込むことには無残な失格者に違ひなからうが、このことが逆に中世文語を形成する一つの特色となっている点は確かなことと思われるのである。

複雑な人物関係　　くおはしまさせ奉らせ給ふく

中古和文に読みなれた目からすると、擬古文はかなり難解であつて、読みにくい。その一つに、複雑な人物関係をきちんと順序だてて述べずに、一文で片付けてしまおうとする表現の仕方に問題がありそうである。例えば、次に挙げる例は、内侍督亡き後、帝はその遺児である若宮を女一の宮(元の姫宮)のもとに預けるように配慮し、また女一の宮も若宮を大事にしたという場面だが、物語はこれを次の通り綴る。

(13) 姫宮、一品の宮になし奉らせ給ひて、その御方に、一の宮はおはしまさせ奉らせ給ふに、方々の、あはれにも、疎かにも思し召されんやは。(15)

この「おはしまさせ奉らせ給ふ」がどうにも理解しがたい。「おはしまさせ」の「せ」は使役。生まれたばかりの若宮に最高敬語の「おはします」を使うのも奇異ではあるが、文意は帝が若宮を女一の宮のもとに行くようにさせた、ということであろう。「奉る」は女一の宮への、そして「せ給ふ」とは帝への敬語と思われる。このように、三者が話題主になつた上

に、使役の対象者まで出してきているといった複雑な構造は、ただただ文意の理解を阻むだけである。

二重の尊敬語・謙讓語　　ゝ思し召し捨てさせ給ふゝ

(14) おのづから、近く候ふ人は見聞こえ奉るに、涙とどめがたかりけり。 (6)

とは、人々が内侍督を亡くした父たる帝と遺児たる若宮、この二人の不憫さを見て嘆くところだが、謙讓語の補助動詞「聞こゆ」と「奉る」が重ねられている。

(15) この世は、ただ夢幻とのみ思し召し捨てさせ給ふに、 (6)

は、帝が出家を決意した場面。「思し召す」に「させ給ふ」を重ねている例である。

(16) 内侍督は、あるかなきかの心地にも、かくと聞き給へば、心安く、思し捨てさせ給はざりけるもうれしながら、… (15)

も、帝が若宮を見捨てつつもりはないことを言っただりで、「思し捨て」に「させ給ふ」を重ねている例である。

「御覽じ給ふ」「仰せられ給ふ」「おはし給ふ」「思し給ふ」「遣はし給ふ」「侍り候ふ」などといった二重の敬語表現は、中世擬古文の最も特徴あるものであつて、どの物語の至るところに見出すことができる。『滴に濁る物語』も例外ではなかった。

これに関連して注意を引くのは、女房達が若宮を内侍督の床に横に寝かせ、あれこれ面倒をみる様子を中納言が見るくだりで、

(17) 傍らに臥せ奉るを見奉り給へば、 (11)

とある。この二つの「奉る」は共に若宮への過当な敬意と思われるが、こうした例も指摘できる。次の

(18) 宰相の中將、(若宮ヲ) 御車に、抱き奉りて、乗せ参らせ給ひつゝ、
(2) 同様である。平安末期以降の敬語補助動詞「参らす」が使われている点も興味深い。

謙讓の「申す」と会話文の「侍り」

「申す」は、動作の客体に対して敬意を表す謙讓語というより、聞き手の支配下に入つて謹しんで申し上げる、格式ばつた緊縮した場面での、文字通り謙讓と呼ぶに相應しい敬語であつた。したがつて、話し手と聞き手との身分さもあり開きがある。中世の文語では、「申す」はその本質的な意味を失ひ、「聞こゆ」「聞こえさす」と大差なくなり、またしばしば尊敬の助動詞「る」を伴つて「申さる」という形で、それも多くの場合、会話文を「申されけるは……」「……と申さる」で挟み込むといった、決まりきつた形式内において、これまた「宣ふ」「宣はす」「仰す」「仰せらる」と大差なく使われる特色がある。⁽¹²⁾

会話文の「侍り」や下二段活用の「給ふ」(『滴に濁る物語』に使用例はない)も、話し手と聞き手との社会的・心理的な距離は大きく、したがつて「申す」で会話が括られる中において共起しやすく、内容も自らの思い、見、聞き、また知る行為を恐縮し、畏まつて申し上げる意味合いを持つていた。⁽¹³⁾

(19) 「ことはりのほど思ひ知られ侍れば、それも『さるべきこと』と思しなせ。昔より、さるふしなきにしも侍らず。さりとも、月ごろ、をこがましく、しれじれしく思ふ人も侍らむ。それも、さも侍り。『御心にだに、あはれと思さば』と思ひ念じつる心のほどは、奥の夷なりとも、あはれは知るなるものを。今だに、少し、世の常にて見えさせ給へ。それのみぞ『日ごろの心思し知りけり』とも思ひ侍らん」など、聞こえ給ふに、
(2)

文意はなかなか理解したい箇所ではあるが、死去を目前にした内侍督を前に中納言は、こうなるのが運命であったと思うこと、世間はあれこれ言うものだが、そんなことを気にせずともよいこと、私のことを愛おしいと思つてほしい、さらにほんの僅かな間でも世間並みな心強い意思を見せてほしいといった、要するに中納言は自分の思いを伝えているのがある。いくつかの「侍り」の使用例が認められるが、中納言は内侍督に恐縮してその意を伝える場面ではない。

また、内侍督亡き後、火葬の煙がまったく燃え上がらないのを人々は兄である宰相の中將に意見するくだりを見られたい。

(20) 「思ひ置く御こともあるにこそ」と申す。(宰相の中將へ)「いかさまにも、一の御子の御ことにてこそあるらめ」と思せば、忍びやかに、御心知りの人、このよしを(帝三)奏し給ふに、(帝八)あるかなきかにて大殿籠れるに、参りて、このよしを申すに、泣く泣く「いかなるべきことぞ」と仰せらるるに、「御文などの候ふべきにこそ」と申すに、

… (21)

物語の展開が単純な割に、人物関係が複雑に入り組んでいて読みにくいのが、人々の宰相の中將に対する発言も、また「御心知りの人」なる人物の帝に対する発言も、「申す」で括られる。その中に、「御文などの候ふべきにこそ」とあり、「侍り」が使われてないので、恐らく「申す」本来の意味を理解して使っているわけではない。「仰せらる」「奏す」の使い方あたりは、まぐれにも的確であつたと言うほかないだろう。

わからない文脈

内侍督の死後、帝が女一の宮に会つて次のように言う。

(21) 「内侍督は、失せ侍りにける。憎しといひながら、よしなきことをさへし出ださせ給ひて、それにより、母宮をも憂

しと思ひ取り聞こえて、人もいたづらになりぬるは、憂きことにあらずや。見馴れたりし我らをだに、常はもの慎ましげなりしを、まして、知らぬ人に待るめり。形見にとどめ置きて待る人、またも待らぬを、見置きがたくなと思ひ侍り。七日過ぎなば、迎へ取りて、預け奉らん」と仰せられて、⁽¹⁶⁾

女一の宮に対する帝の会話文中に「侍り」が乱立して用いられているのも理解できないが、それ以上に、女一の宮がしたという「よしなきこと」とはいつたい何なのか、「母宮をも憂し」と思わせてしまった経緯とはどういうことなのか。そのことが原因となって内侍督は死んだというのが、読者にはそのあたりがまったくわからないのである。

中納言の母、殿の上が、

(22)「中納言は、いかばかりあはれに思し召すらん」と思ふに、「我をも憂しとこそは思し召さるらめ」と思す。⁽¹⁷⁾

とある「憂し」とは中納言は、母宮に対して何を思っていたのか、また出家を控えた帝が女院を呼んで、

(23)よしなきこと一つにより、我も人も心置き奉りにしも、今は悔しく侍り。⁽¹⁸⁾

とある「よしなきこと一つ」とはいつたい何か、意味不明である。本文の欠落した部分にその記述を期待することすら出来ない、実にわかりにくい文脈が続くのである。

謙讓語の補助動詞「奉る」「聞こゆ」と「参らす」

謙讓語の補助動詞として用いられた敬語には、文語の「奉る」「聞こゆ」と中古末期以降になって伸張する「参らす」がある。「聞こえさす」はない。

「奉る」と「聞こゆ」「聞こえさす」の差異は、上接語との親疎関係に求められることが既に明らかにされている。⁽¹⁴⁾『滴に

濁る物語』の場合をすべて列挙してみたい。

「奉る」をつける語彙

し・見・臥せ・書き・守り・抱き・告げ・見なし・なし・預け・迎へ・思はれ・思ひ・譲り・据ゑ・悲しみ・離れ・頼み・心置き・思ひ育み・留め・贈り・後見・言づけ

「聞こゆ」をつける語彙

見・思ひ取り・馴れ・移し・思ひ・訪ひ・思はれ

「参らす」をつける語彙

思ひやり・乗せ・思はれ・後れ

以上の結果から、「見る」に代表される知覚動詞は、中古一般に「奉る」がつくが、ここでは「聞こゆ」も差なく使われる。
 (24) 宰相の乳母、「今は限りにこそ」と(内侍督ヲ)見奉る氣色、とかくものも覺えんやは。(5)

(25) 宰相、急ぎ(内侍督ノ元ニ)おはして、見聞こえ給ふに、中納言、同じさまにて添ひ臥し給へり。(6)

「思ふ」に至っては、「奉る」も「聞こゆ」もまた「参らす」もその使用例が認められ、その使い分けは意識されていなかったものと理解できる。

(26) (帝ハ)「この一の宮を、そこよりほかに、あはれと思ひ奉るべき人、さらになし。…」などと、(16)

(27) (院||元ノ帝)「…今は悔しく侍り。(一品の宮ハ)『一の宮おはしませば、むげに思し召し過ぐさじ』となん思ひ聞こゆ。

…」など、(20)

(28) (中納言ハ)「この御ことにつけても、母の御こと、(内侍督ハ)いかばかり思し召し出づらん」と思ひやり参らすも、…(1)

既に文語と化している「奉る」や「聞こゆ」を取り込むこと自体は、それらしい雰囲気醸し出してはいるが、その擬え方がいかにも形式的に過ぎない点は否めない。こうした異質性が中世和文体の特色を作り上げているものといえるだろう。

中古敬語の平均化と形式化　　中世文語の特色

例えば、中古における尊敬語の「見給ふ」と「覧ず」、「思す」と「思し召す」、「宣ふ」と「宣はす」、「おはす」と「おはします」、それに補助動詞の「給ふ」と「せ給ふ」、「させ給ふ」など、また謙讓語の「聞こゆ」と「聞こえさす」は、それぞれ中間敬語と最高敬語の違いであって、登場人物相互の序列関係や身分に応じて使い分けられるのが普通であった。擬古文においては、その用法上の差はなく、それらは同じ程度の敬語として取り込まれる傾向がある。こうした中世文語の特質を、ここでは平均化と呼んでいるのである。だが『滴に濁る物語』では、これまで見た擬古文とはやや異なる一面が認められるようである。

まず、「思す」と「思し召す」の違いについてだが、敬意の対象となる人物と用例数を示しておきたい。ただし、解釈上の違いが生じるので、数値はおよそのものである。「思し扱う」「思しなす」「思し知る」「思し寄る」などの複合語は数えていない。身分は、登場時におけるものである。

「思す」の対象となる人物

中将4・帝4・内侍督9・女院2・中将や中納言1・中納言2・殿の上1・前の大臣1

「思し召す」の対象となる人物

帝14・院2・中宮2・中納言2

帝・中宮クラスに偏りがあるとみてよいのではないか。中納言へは、殿の上の会話に局限して次の通り使われている。

(29) (殿の上へ) 「中納言は、いかばかり、あはれに思し召すらん」と思ふに、「我をも、憂しとこそは思し召さるらめ」と思ふ。上(≡帝)は、思し召し立つ御こと(≡出家)も、心もとなく思し召さる。(10)

このあたり、やたらと「思し召す」があり、中納言への敬意もあるいはその連続上、使われたに過ぎないのかもしれない。何れにしても、「思す」と「思し召す」は、比較的よく使い分けられているように思われる。

次に「おはす」と「おはします」についてみてみたい。

「おはす」の対象となる人物や事柄

内侍督2・宰相の中將1・摂政1・中納言トノ契り1

「おはします」の対象となる人物や事柄

若宮誕生ノコト1・若宮1・帝4・院5・皇太子1・内侍督1・中納言トノ契り1・女一の宮2・君達1・

左大將、頭中將、中宮の亮1

内侍督に対して、

(30) なかなか、「なからんのみぞすからめ」と、深く思し取りて、ただ同じきさまにのみおはす。(4)

(31) (中納言へ) ただ、「御供に具しておはしませ」と、声も惜します泣き給ふさま、ことわりなり。(5)

と、「おはす」「おはします」共に使われる例もあるが、「おはします」は「おはす」より敬意が高かった意識が表れているとみてよいのではないだろうか。

では、「給ふ」と「せ給ふ」「させ給ふ」の違いはどうであろうか。

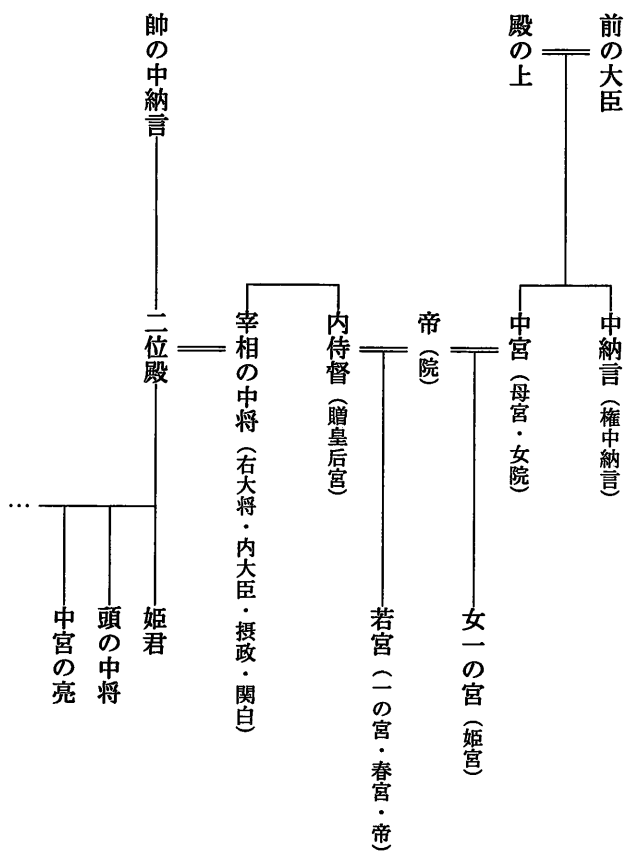
(32)内裏には、若宮渡らせ給へりと聞かせ給ふにも、「母ながらと思はましかば」と、それにつけても、御胸塞がらせ給ひて、宰相の、文参らせ給へるをも、夢かとまで御心騒ぎして、(内侍督ノ歌二首ヲ)御覧すれば、… (33)

の例は、帝を動作主、すなわち敬意の対象として、「せ給ふ」が使われている。「母ながらと思はましかば」は帝の心中だが、やや意味が通りにくい。恐らく、若宮の参内は、それはそれでうれしいことに相違ないが、もし母親、すなわち内侍督と一緒に参内であることを思ったら、さらにいつそう喜ばしいことになるだろう、くらいの意味と解釈できる。したがって、「思はましかば」に敬語はなくてよい。「御覧すれば」は、帝に対する最高敬語である。

(33)宰相の中将は、(帝ガ)「若宮の五夜・七夜のほどは候はせ給へ」と仰せられ、我も、さ思しつるに、かくと聞き給ふに、もの覚え給はんやは。心もあわたたしく、内裏に、「かうかう」と奏してまかで給ふを聞かせ給ふ御心、「今は、さは、よそながらだに聞くまじきにこそ」と三瀬川の渡りに、我も急ぎ行かまほしく、浅からず思し召さるるに、御衣を引き被きて、大殿籠りぬ。 (34)

ここは若宮誕生のめでたい最中、宰相の中将は帝に内侍督の死を伝えなければならなくなった。帝は、共に死出の道を急ぎ、悲嘆にくれる場面。宰相の中将には「給ふ」、帝には「せ給ふ」を使い分けている。謙讓語「奏す」や「まかづ」、また最高敬語の「思し召す」や「大殿籠る」の使い方もだいたいの確である。

「系図」(本論文に関係する部分のみ)



〔注〕

- (1) 中野幸一『物語文学論考』一九七一・十月 二八八頁
- (2) 注(1)文献。
- (3) 注(1)文献ほか、山岸德平「ある逸名の物語とその本文」(『文学・語学』第二十八号 一九六三・六月)、小木喬「しづくに濁る物語考」(『国語と国文学』一九六九・六月)、阿部秋生・前田裕子「雫に濁る物語」(『実践女子大学文芸資料研究所年報二』一九八三・三月)その他。
- (4) 沢田正子「しづくに濁る物語」(『体系物語文学史 第四卷』一九八九・一月所収)
- (5) 三谷邦明「しづくににごる」(『解釈と鑑賞』一九八一・十一月)
- (6) 市古貞次・三角洋一『鎌倉時代物語集成 第四卷』一九九一・四月
- (7) 室城秀之『中世王朝物語全集 11』一九九五・十月
- (8) 筆者は、かつて中世の擬古文の敬語について、登場人物相互の序列関係等によって、微妙に使い分けられていた中古敬語が、その差別をなくし、同じ程度の敬語として取り込まれる様相を「平均化」、また敬意の重さや用法とは無関係に、あるいはその意味を理解せず、中古的な雰囲気を感じ出している様相を「形式化」と呼び、この平均化と形式化が中世文語の敬語の特色を形成していると論じたことがある。(勝山幸人「中世和文体の特色について―擬古文の敬語を中心に―」(『静大国文』第四十二号 二〇〇一・三月)
- (9) 此島正年『国語助動詞の研究』一九七三・十月 一〇六頁―一八頁
- (10) 森野宗明「敬讓の助動詞 る・らる」(『助詞・助動詞詳説』一九六九年十月 三二頁―四〇頁)
- (11) 勝山幸人「和文体」形成の構想について」(『静岡大学人文論集』第四十九の二号 一九九八・七月)
- (12) 勝山幸人「中古における「申さる」という表現」(『山口国文』第十三号 一九九〇・三月)

(13) 和田利政「源氏物語の『申す』」(『國學院雜誌』一九五六・十二月)

(14) 和田利政「源氏物語の謙遜語―補助動詞『奉る』と『聞ゆ』について―」(『日本文学論究』第十号 一九五二・七月)

「テキスト」

例文の引用に関して、表記そのものを問題にしない限り、本論文では、論文としての読みやすさを考え、依拠したテキストにある字句や表現をもって示している。『滴に濁る物語』は、注(7)文献に拠っているが、所在は、編者が小節に分けて通しの番号をつけたものをそのまま示すこととした。他の『伊勢物語』『土佐日記』『源氏物語』『古今和歌集』は、何れも小学館『古典文学全集』所収の本文に拠っている。